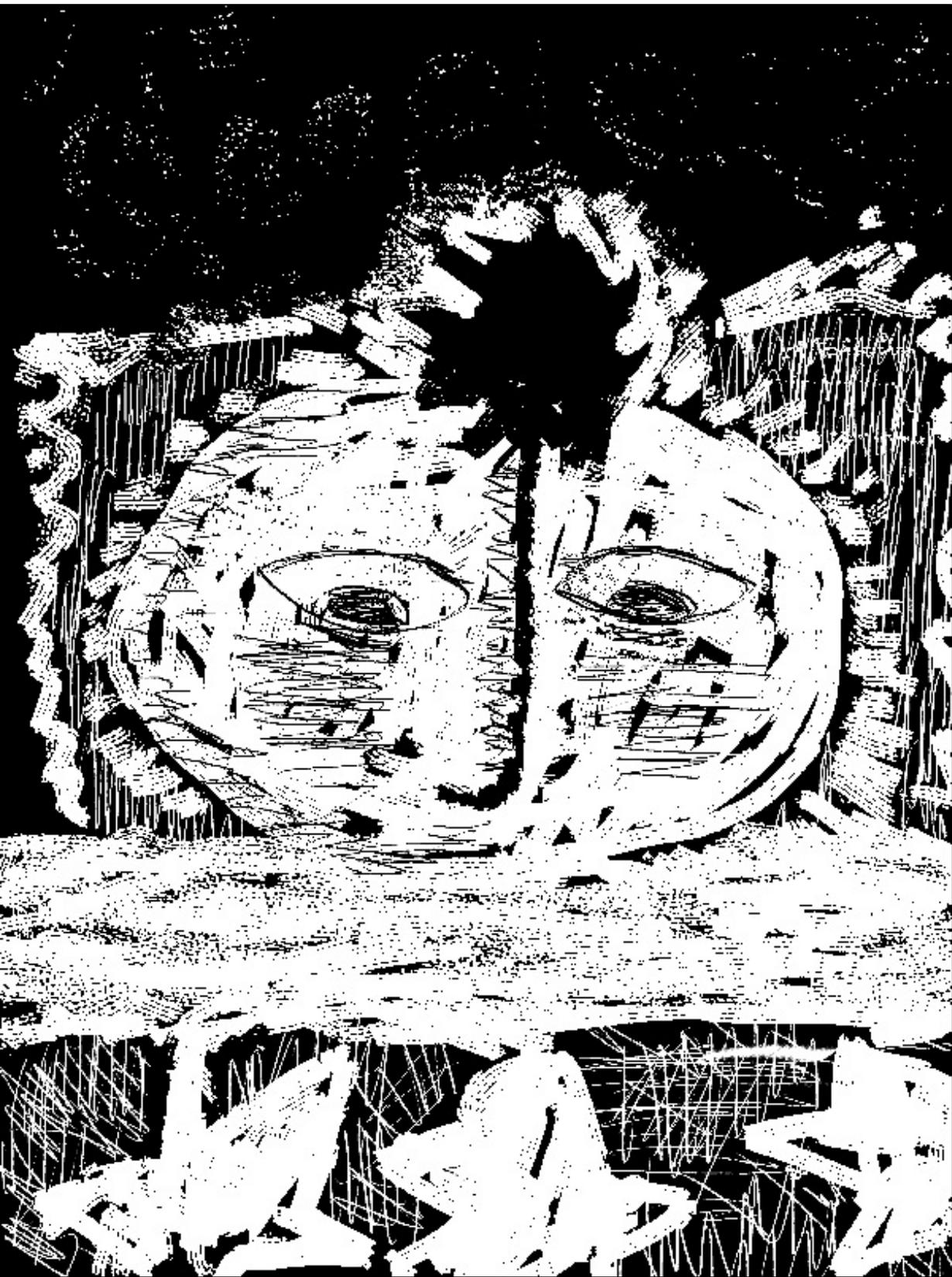


君はきっと、僕が今、

すやすやと眠っているとお思いでしょう。



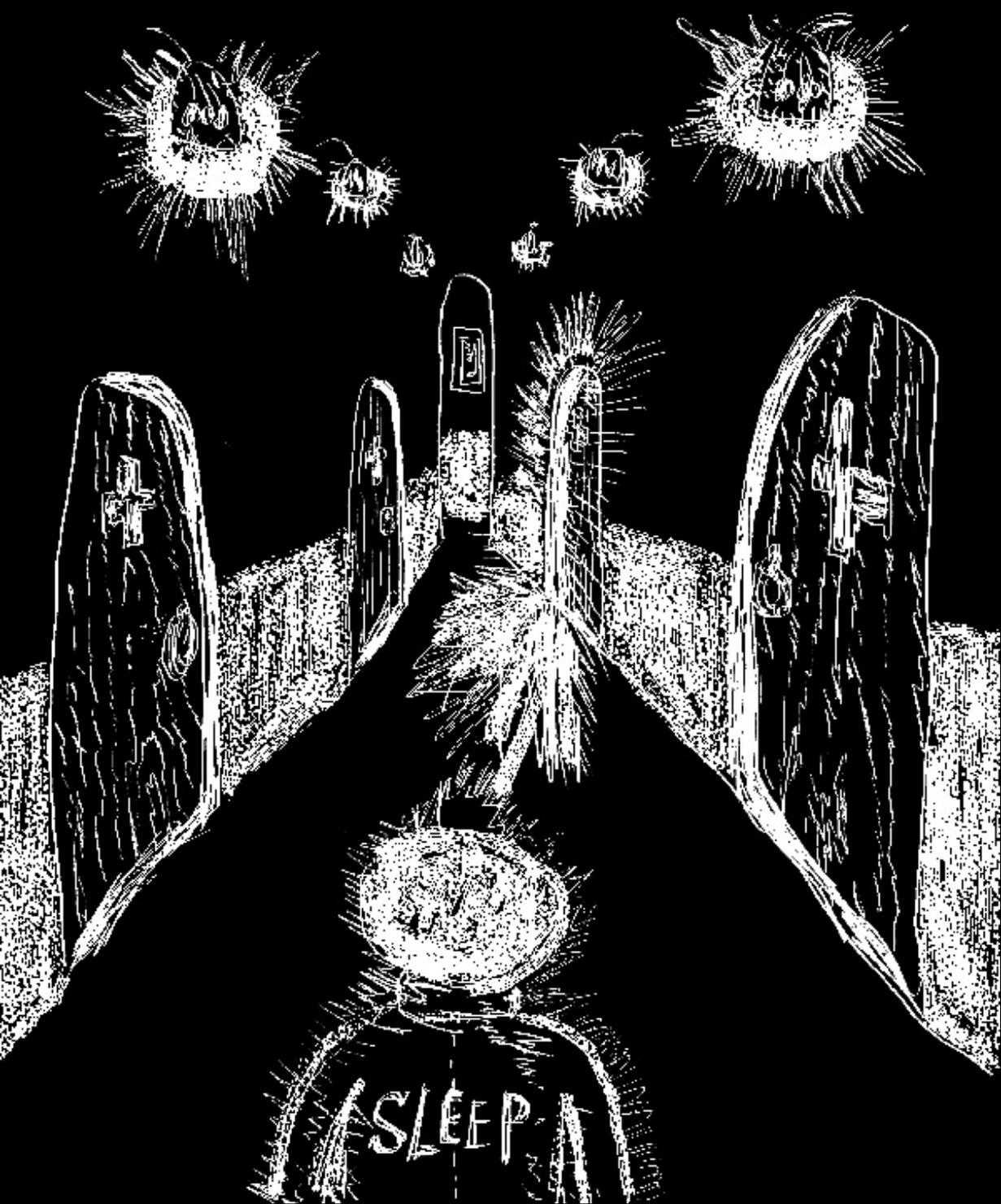
ところが…ですね。  
実は、まんじりとも、  
できてないのですわ。これが。

昨日も、おとといも、その前も、  
もう何週間も眠れないのであります。  
6歳児にして、すでに、不眠症な僕。

もしかして、ちょっぴり、不幸…



眠れんときは、しゃーないですね。  
寝たふりしてても仕方ない。  
もう、起きちゃおうっと。

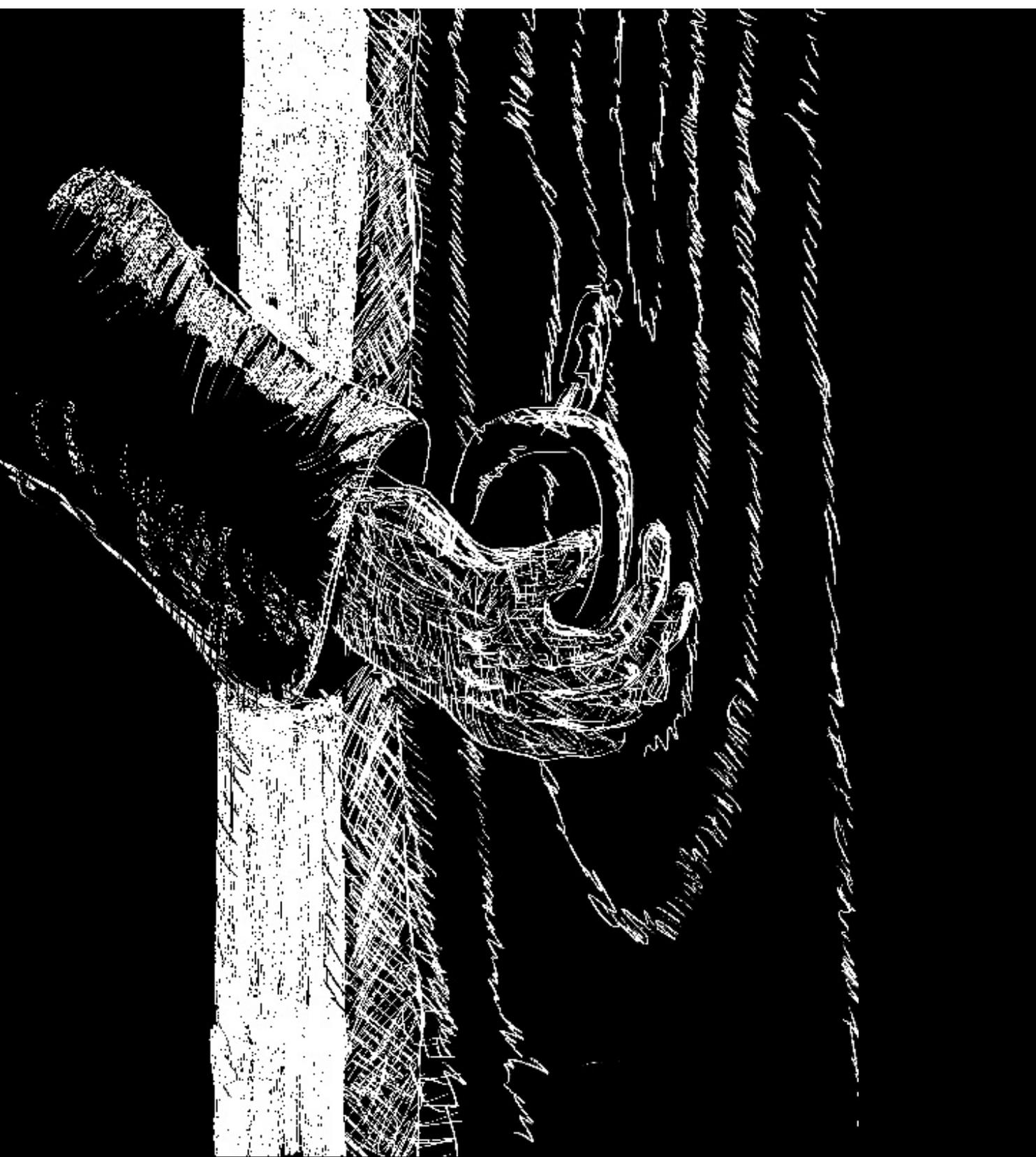


で、ミルクでも飲むかと思って  
僕はキッチンに向かったのであります。  
とぼとぼとぼと、廊下を歩く僕。

しかし…おや、おや。  
キッチンからは明かりが漏れているではないか。

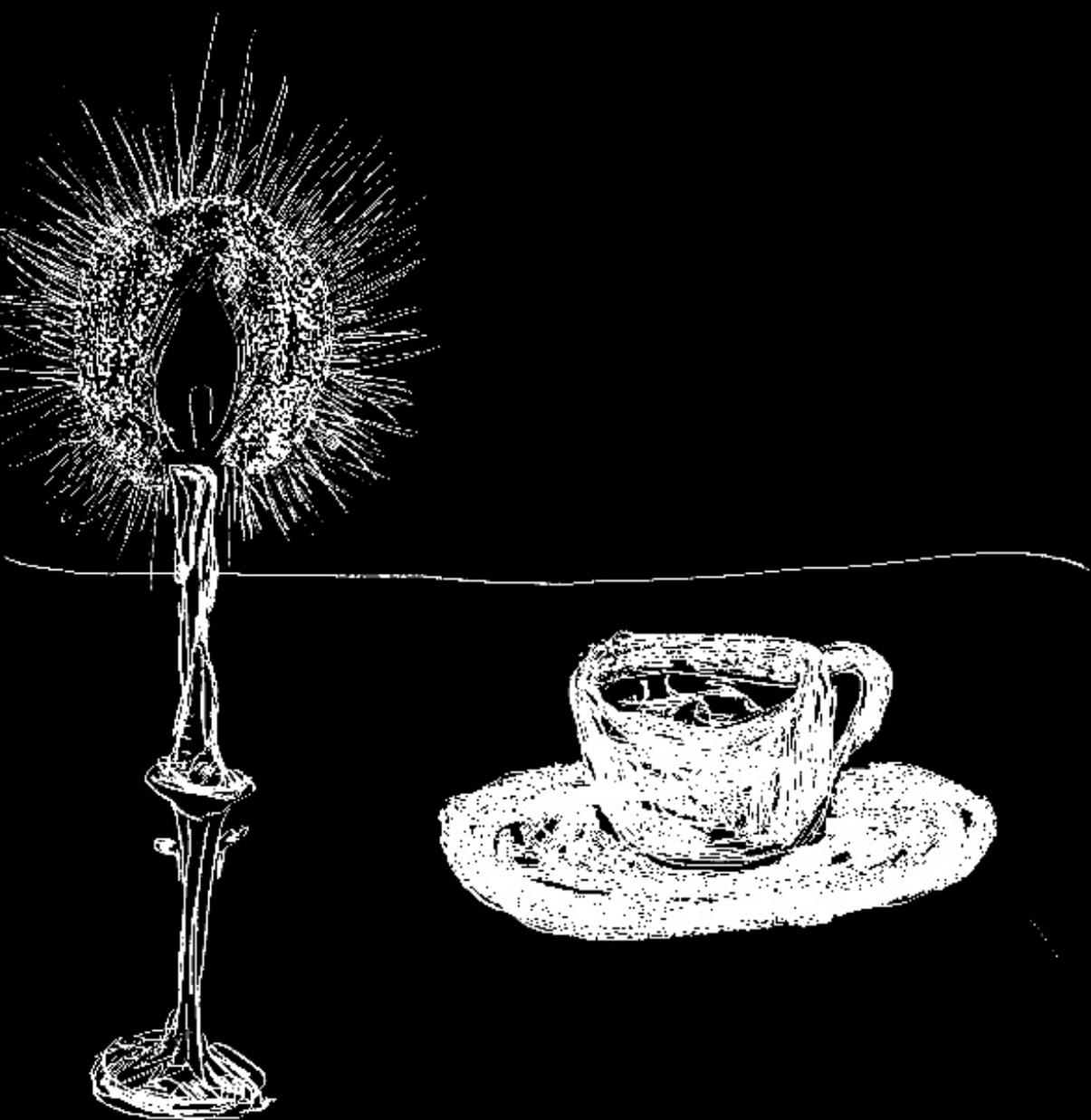
こんな夜更けにも、

おとなというヤツは起きているのかな。



ギギギギ、と扉を開く。

引き戸か押戸か、はっきりせんだアじゃな（汗



リビングキッチンには、コーヒーのいい匂い。

「あ。叔父さんではありませんか」

「やあ。甥。  
叔父さんは、遊びに来たのだけれど、  
深夜だったもので、こっそり侵入したのですよ」

叔父さんはいつも、こんな登場の仕方をするのです。

あ・や・し・い・お・ひ・と・じゃ。

でも、僕は、なぜだか、

そんなおじさんが大好きなんです。



不眠のことを相談すると、

「眠れないのかね。  
そりゃあ、お気の毒に。  
そんな場合はいったい、  
羊を数えてみてはどうだろう」

叔父さんはそんなアドバイスをくれたのです。

24歳(現在)

6才

13才

3,261,025,165

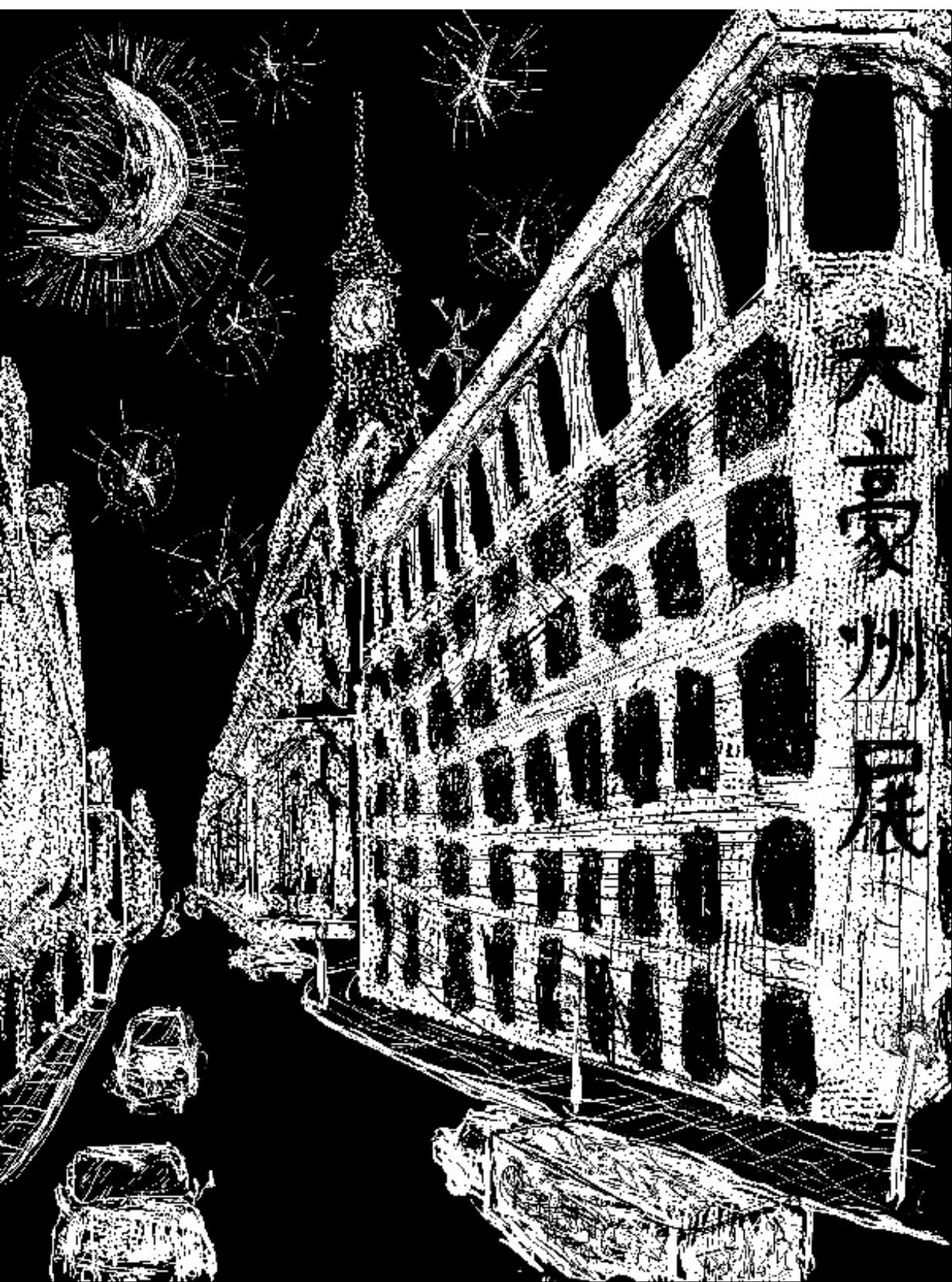
10,000

8億



それ以来、僕は羊を数えつづけ、  
現在では、すでに、  
その数、ゆうに32億を





さて、そんなある日、百貨店で  
オーストラリア展が開催されると聞いて、  
僕はさっそく駆けつけたのです。

だって、なぜなら、  
ホンモノの「羊」が見られるというんだから。

まだ、実物は、一度も見たことがなかったんです。



しかし…

え。これが…羊？  
羊なの、これ？

こんなのでしたっけ？  
前から、ずっと？

ほほう。そうでしたか。  
いやはや。  
まいったな。  
そうか。  
そうであったのですか。

これが、君が、  
正真正銘、



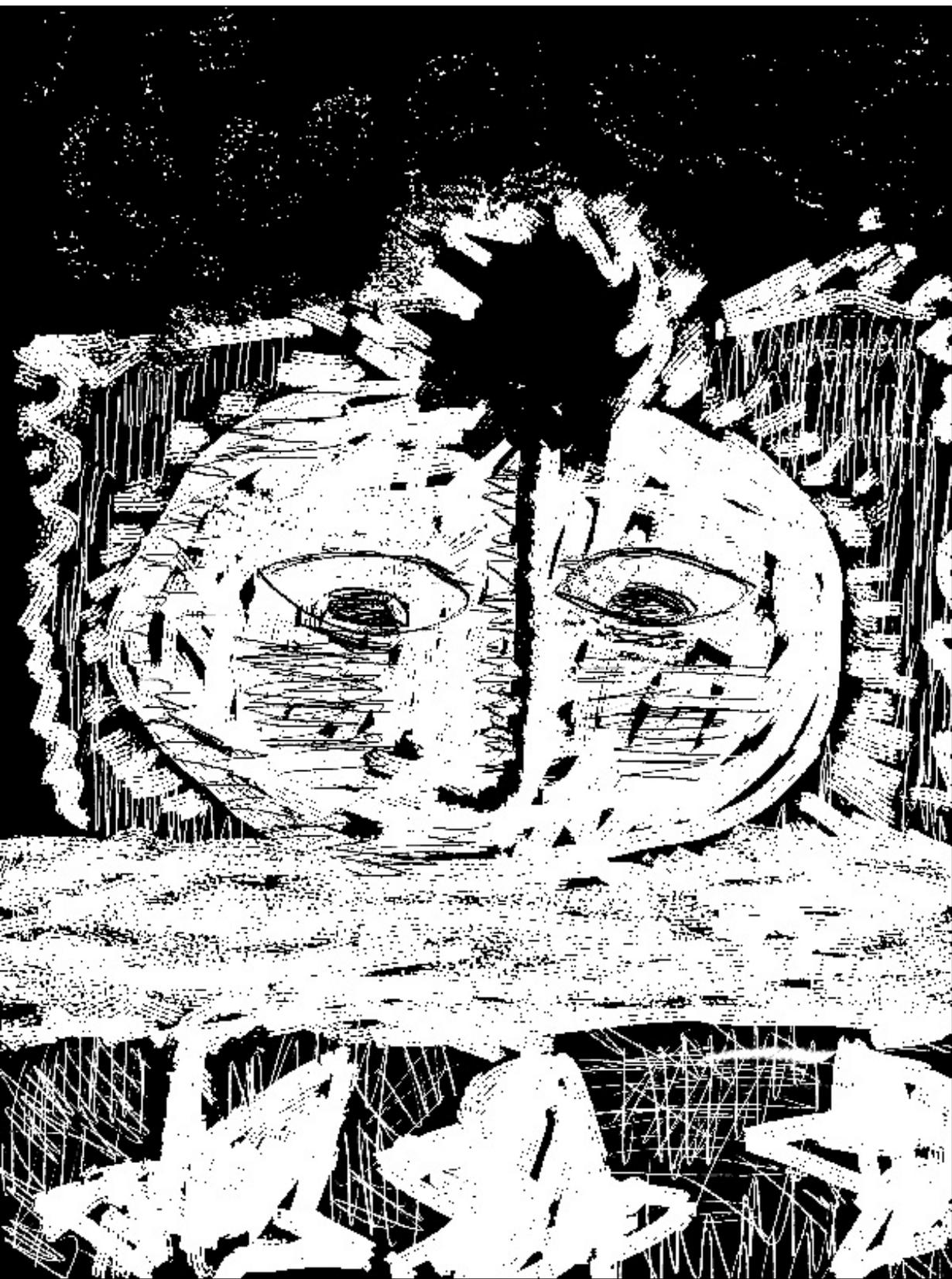


「そう。  
わたしが、羊」

しゃべったわけではないのだけれど、  
そんな声、聞こえた気がしたのです。  
極度の睡眠不足による幻聴かもしれませぬ。

そうか。これが羊なのか。

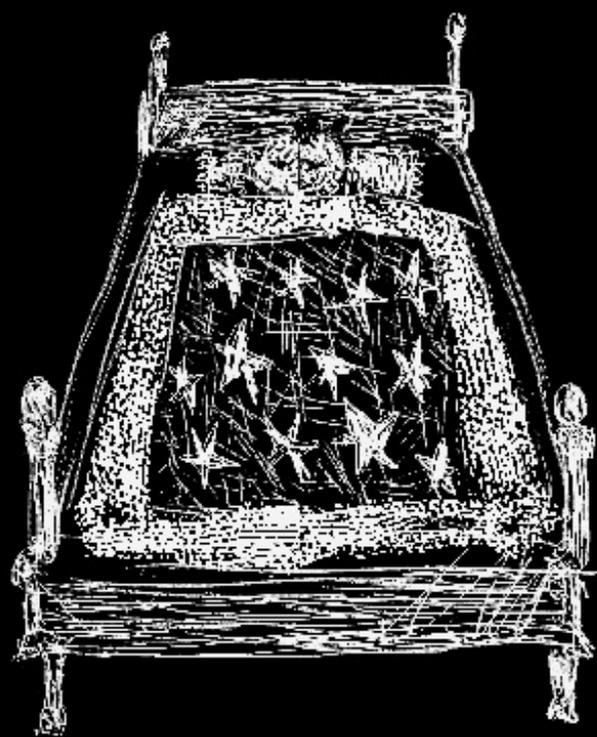
どうりで、数えても数えても、眠れなかったわけだ。



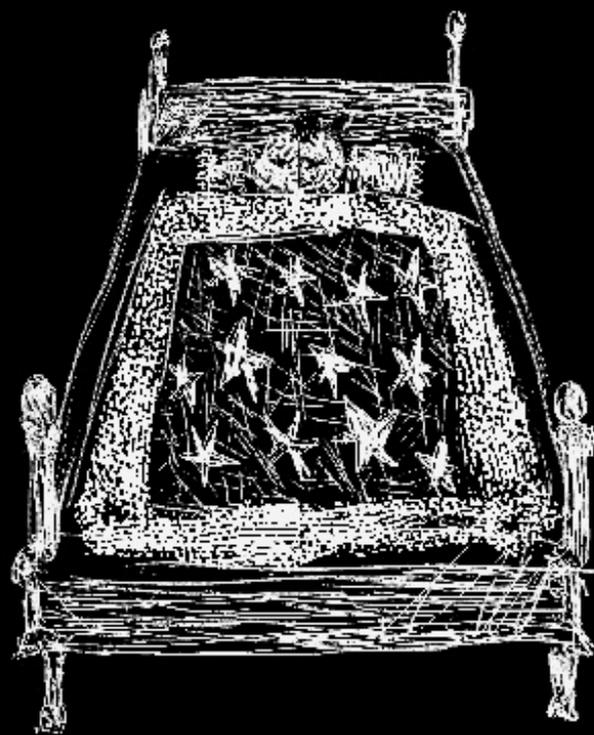
しかし、そうになると、僕は、  
とても不思議な気持ちに  
さいなまれるのです。

では、いったい、  
僕が、これまで、数えてきたのは、

何だったのだろう？



何だったのだろう？



何だったのだろうか？

あの動物たちは???